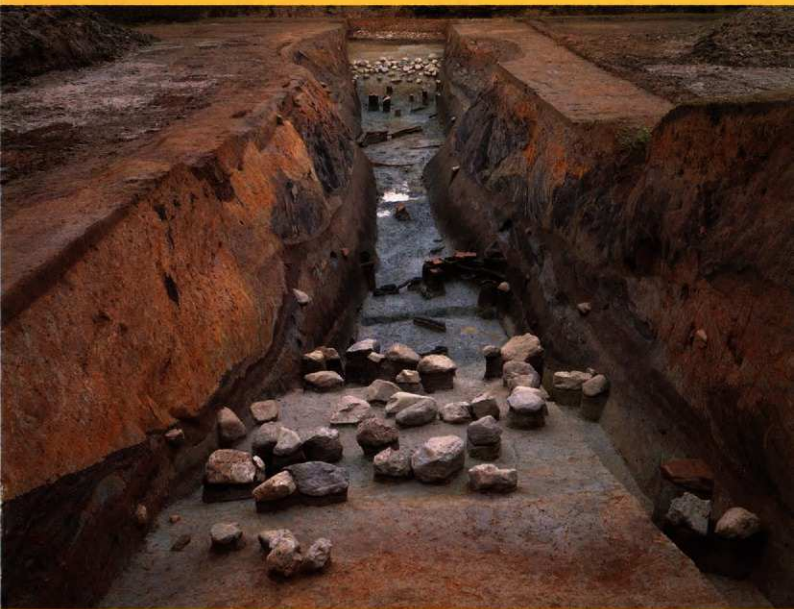


史跡・今城塚古墳

—平成10年度・第2次規模確認調査—



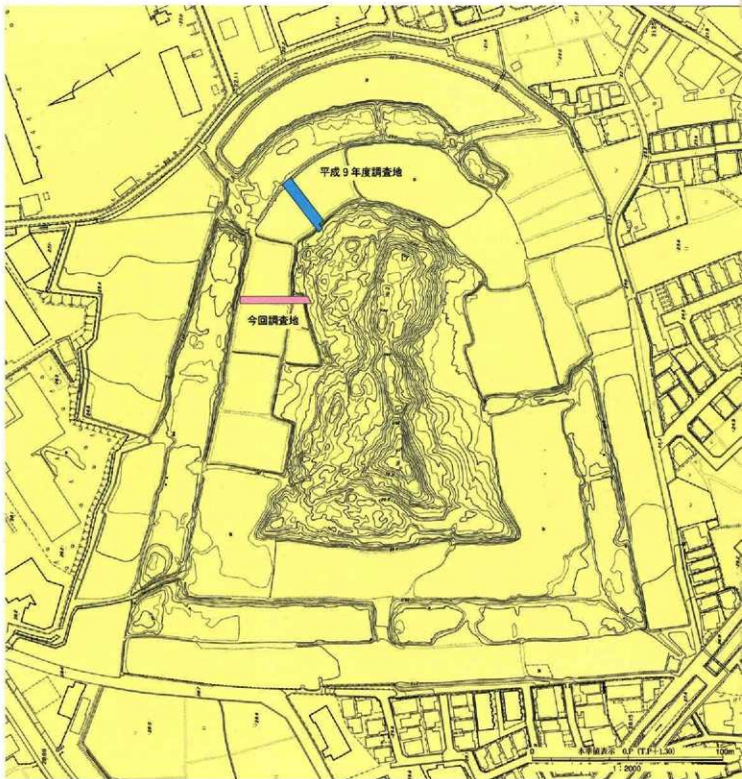
1999

高槻市教育委員会

はじめに

今城塚古墳は淀川北岸地域で最大の前方後円墳で、西暦531年に亡くなったとされる継体大王の真の陵墓と考えられています。昭和33年に国史跡に指定され、教育委員会では将来の本格整備に向けて平成8年に詳細な測量図を作成し、次いで平成9年には第1次規模確認調査を実施しました。この調査により、後円部についての重要な知見を得るとともに、墳丘を切り崩し城砦として再構築している状況がはじめて明らかになりました。この城砦は巨大なブロック土で内濠を埋め立てた様子から、戦国時代末期に築かれたとみられ、「今城山城（いまきやまじょう）」と命名しました。

今回の調査は、昨年の第1次規模確認調査の成果を受けて、後円部北側の内濠の規模・形状の把握、および「今城山城」の様子や築城の方法を知るためにおこなったものです。



表紙 墳丘側からみた内濠（西南側から）

古墳について

内濠の底を検出し、これとともに後円部側と内堤側の裾部分を確認することができました。内濠底の幅は18.5m、深さは現地表面から約3mを測り、底はおおむね平坦です。後円部および内堤斜面には葺石状の列石があります。人頭大からやや大きめの石を斜面に据えています。内堤側は幅約1.5mの範囲で良好に検出できましたが、後円部側は大半が崩落していました。傾斜面の角度は内堤側は23度、後円部側では裾から2mほどは25度でたちあがった後、列石付近で15.5度とやや傾斜が緩くなっています。

内濠底の後円部寄りでは溝を検出しています。溝は幅0.4m、深さ0.2mの断面逆台形の溝で、後円部の裾に沿って掘られ、第1次調査で検出した築造時の排水溝とみられる溝1につらなるものと考えられます。

濠底から約1mの厚さに堆積土（泥土層）がみられます。堆積土からは、円筒埴輪片のほか、ドングリや倒木などを多量に検出し、また石棺の破片とみられる阿蘇溶結凝灰岩の細片も出土しています。さらに濠底付近では、木製品もみつかっています。一方、調査区北端に位置する内堤斜面中腹では、埴輪片がまとめて出土しています。

以上の点を第1次調査の成果と比較してみると、内濠底幅は18.5mで前回調査の20mを下回っており、内堤斜面の角度にも違いがみられます。これらは、第1次調査地が後円部側に位置するのに対し、今回は後円部側から前方部側に移行する部分にあたり、内堤や濠の形状が異なっているためとみられます。また後円部斜面については、第1次調査では25度でたちあがった後、犬走り状の平坦面がみられましたが、今回は検出していません。しかし裾のたちあがり角度は25度と同じ値を示し、後円部斜面の形状をある程度推定することが可能となりました。

調査区全景（北側から） 内堤側からみた内濠



「今城山城」について

古墳を改修して城砦として利用するための大規模な土木工事の様子が明らかとなりました。墳丘から切り出した巨大な土のブロックが大半を占める埋積土によって、内濠を埋めています。一辺2mから大きいもので5mを越えるブロック土をひとつの単位として、まず内濠の内堤側（外側）から落とし込み、順次後円部方向（内側）へ埋めていき、ブロック土とブロック土に挟まれた谷間に褐色系の土を充填しています。第1次調査ではこれとは逆に後円部側から埋めていた状況がみられましたが、内濠を埋めるに際して現場に即応した手順が採られたとおもわれ、埋め立てを実施したグループが複数存在したのかもしれませんが、ブロック土は、0.4m×0.1mの小土塊で構成されています。この小土塊は、古墳の墳丘を構成していた最小の単位であり、ブロック土内には小土塊を積み上げた状態をしめす、うろこ状の模様が良好に観察できます。また、ブロック土の上面には均質な褐色粘質土があり、内濠を埋めた後、上面の凹凸を人為的に均らそうとしたものとおもわれます。埋積土のブロック土の隙間の土層から天目茶碗が出土しています。

一方、これまで後円部墳丘の名残であるとされてきた後円部上の傾斜面の下層にもブロック土の存在が確認できました。内濠の埋め立てと同様に墳丘土を分断して切り出し、墳丘部に土壁や堀切を形成したものとみられます。とすると、これまで古墳北半部の墳丘の名残とみられていた小山のような起伏は、じつは、築城時に切り出され動かされたもので、むしろ今城山城築城に伴う残余の土塊である可能性があります。

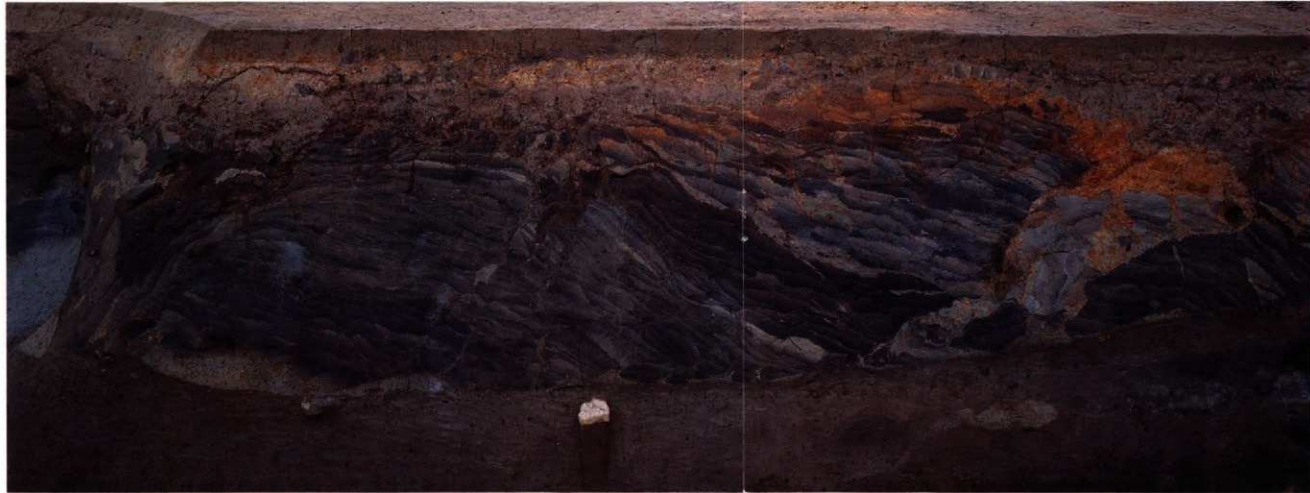
第1次調査で検出した障子堀は、今回の調査では確認していません。また内濠部の埋積土上面でも、城にかかわる遺構は検出できませんでした。



A方向：内濠を埋めている巨大ブロック土



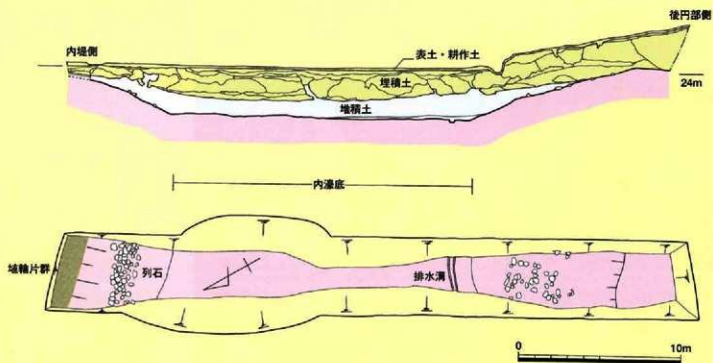
B方向：
墳丘上の動かされた巨大ブロック土
壁面の高さは約3m



内堤斜面の埴輪片群（北西側から）
灰色砂層（埴積土）上面で検出した。



内堤斜面の列石（西側から）
幅1.5mの範囲で検出した。



調査区 平面図・断面模式図



内堀底の排水溝（西側から）



後円部斜面の列石（北側から）
大半は転落した状態で検出した

出土した遺物について

内堀の底付近から木製品が出土しました。掛矢は、不定形直方体の身と柄を一木から削りだしており、身の正面と側面に打突痕跡がみられます。もう一点は、扁平な身と柄を備えた櫛状のもので、先端は欠けていました。これらは、堆積土の最下層から出土しており、古墳築造時に使用された道具とみられます。

また16世紀後半代の瀬戸焼きの天目茶碗が、内堀の埋積土から出土しました。出土したところはちょうどブロック土間の隙間に充填した土層で、築城工事の際に投棄されたものとみられます。



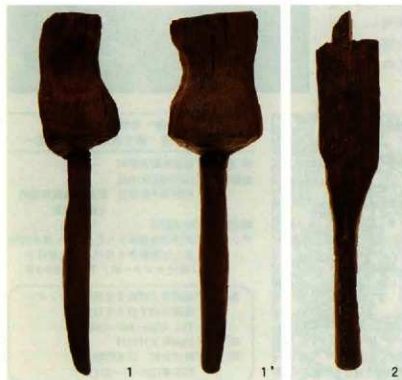
上：内堀底の木製品出土状況

左：内堀底から出土した木製品

- 1 掛矢 全長54cm
- 2 櫛状木製品 現存長48cm

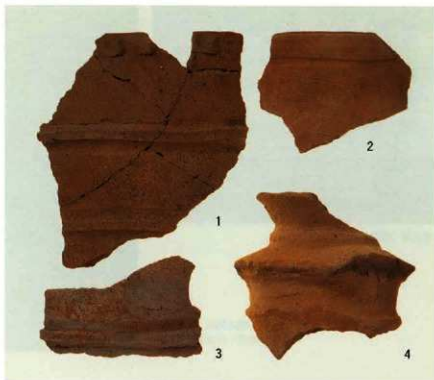
下：埋積土から出土した天目茶碗

口径11.5cm





線刻のある埴輪 約1/2



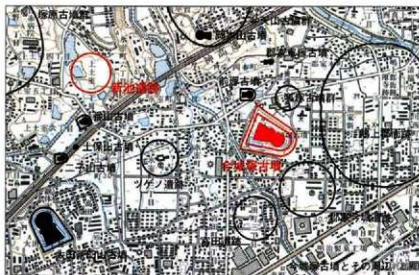
円筒埴輪 (1~3) 蓋形埴輪 (4) 約1/4

まとめ

今回の規模確認調査により、後円部北側における内濠部分の形状や規模を把握することができ、古墳の保存・公開に向けての貴重なデータを得ることができました。

また今城山城については、内濠を巨大なブロック土で埋めるという一連の作業に代表される築城工事の実態が追認され、調査前に推定した以上に大規模かつ計画的であったと考えられるようになりました。このような大土木工事を伴う築城の主体者として、永祿11(1568)年に摂津へ侵攻し、三好勢を一掃した織田信長を想定していましたが、今回の調査で出土した天目茶碗は、そうした推測を裏づけるものといえます。

現地説明会 (平成11年1月9日)



史跡・今城塚古墳 —平成10年度 第2次規模確認調査—

所在地/高槻市郡家新町
史跡指定/1958年2月18日
1991年7月20日 新池埴輪製作遺跡
を追加指定

指定面積/80,632㎡
アクセス/JR摂津富田駅から北へ1.5km、徒歩20分
または同駅から市バス奈佐原行き
「福祉センター前」下車、徒歩3分

編集/高槻市立埋蔵文化財調査センター
高槻市南平台5丁目21-1

TEL 0726-94-7562

発行/1999年8月31日

印刷/株式会社 日東印刷

TEL 0726-77-3711